

途上国研究の先端的内容を平易に解説します。

途上国研究の 最先端

第 39 回 伝統的な統治が住民に利益をもたらす ——メキシコ・オアハカ州での公共財の供給

川中 豪

2020 年 2 月

(2,899 字)

今回紹介する研究

Beatriz Magaloni, Alberto Díaz-Cayeros, and Alexander Ruiz Euler. 2019. "Public Good Provision and Traditional Governance in Indigenous Communities in Oaxaca, Mexico." *Comparative Political Studies* 52 (12):1841-1880. doi: 10.1177/0010414019857094.

地方政府（自治体）の役割は何かと聞かれば、それは住民に利益を与えることだという答えが返されるだろう。具体的な利益としては、上下水道の整備や教育などの公共財・公共サービスの提供が頭に浮かぶ。これは、住民と地方政府の間にいわゆるプリンシパル・エージェントの関係、すなわち、依頼人と代理人の関係が存在しているとも言え換えられる。代理人である地方政府には、依頼人である住民の利益をできるだけ大きくすることが求められるということだ。

しかし、実際には、地方政府、特にその首長は、自分の個人的な利益を優先し、住民の利益を後回しにしてしまうかもしれない。これを防ぐには、首長が常に住民の意向に沿うような仕掛けを設定しておく必要がある。選挙はそのためにある。住民の意向に沿わない政治家は再選が難しくなり、それを考えれば住民に利益をもたらすよう必死にならざるを得ないはずだからである。

ところが、多くの人がすでに知っているとおり、現実はそれほど単純ではない。選挙があったとしても、首長はさらに上位のポストを狙って所属する政党の幹部の方ばかり見ていたり、自分の支持者たちの利益にだけ配慮したりすることも珍しくない。住民の側も、町全体の状況に関する情報や技術的な知識など、公共財・公共サービスの提供の前提となる様々な情報がないため、首長にはぐらかされることも多い。

必要な公共財・公共サービスをより適切に住民に提供するにはどうしたらよいか。ここで

本研究が注目したのは伝統的な統治の制度だった。これまで伝統的な統治は、近代的な政治制度によって乗り越えられるべきものと考えられてきた。選挙による選抜を経験しない伝統的リーダーは住民に対し責任を負わず、人々の福祉は低く抑えられると見られているからである。しかし、場合によっては、伝統的な統治の方が、近代的な民主主義制度よりも首長が住民の利益を尊重する状況を生み出し、より多くの公共財・サービスを提供することがある。本研究は、これをメキシコのオアハカ州のユニークな地方統治の制度的特徴を利用して実証したのである。

1995年のメキシコ憲法改正は、オアハカ州に町レベルで伝統的な統治を復活させることを可能にした。住民たちが直接参加する住民集会を重視したウソス・イ・コストンブレス（以下、ウソス）と呼ばれる統治である。この伝統的統治の復活によって、住民集会によって選ばれるリーダーは、政党を主体とした選挙によって選出される首長と同じ権限を持ち、上下水道設備など公共事業を計画し実施していくことになった。ただし、オアハカ州全土でこのウソスが導入されたわけではなく、これまでどおり政党間の競争を前提とした選挙によって首長を決める町も同時に存在し続けた。このウソスを導入した町と、旧来の政党中心の政治に統治を委ねる町の区分けは、住民の意思とは関係なく州政府によって外生的に導入されることになった。本研究は、この線引きを自然実験としてとらえ、ウソスによる統治の効果を地理的回帰不連続（GRD）デザインによって検証したのである。

町のリーダーに大きな裁量が認められている上水道設備と下水道設備の普及に対する統治のタイプの違いがもたらす効果を検証した結果、下水道の整備状況には統計的に有意な違いが認められなかったものの、上水道についてはウソスによる統治の方がより多く設備を普及させていることが明らかになった。それだけではなく、町の中心部と周辺部の設備の普及のバランスを見ても、政党政治に基づく町では中心部への設備普及の偏りが有意なレベルであるのに対し、ウソスの町ではそうした偏りが認められなかった。これは、ウソスのもとで貧しい地域に対しても分け隔てなく公共財の提供が行われているということである。

さらに、こうした伝統的な統治の効果を示すだけでなく、本研究では100件を超えるインタビューなど定性的な調査も合わせて行い、ウソスがそうした公共財に対する効果を生み出すメカニズムにも分析の射程が広がられている。そこでは、観察やインタビューに基づいてウソスが公共財の提供で良い効果をもたらす三つの要因があげられている。一つは、リーダーが共同体の共同活動で実績のある者のなかから選ばれ、その地位から外れた後は以前のようになり一人の構成員として再び共同活動に参加しながら生活するため、事後的な共同体の制裁を恐れて権力の濫用が制限されること。もう一つは、住民にはウソスでの意思決定に住民集会の場を通じて参加する義務があり、政策に関わる情報が共有されていること。情報の共有は住民集会での熟議を通じ住民の真の選好を明らかにすることを可能にし、さらに、リーダーが住民集会の意思を尊重する慣習があるため、それが実際の配分に反映される。対照的に、政党中心の統治の町では、実質的に首長の独断で資源配分の仕方が決定されている。そして

最後に、清掃や宗教的行事など共同体の活動への参加が住民に義務づけられているため、共同体の福祉向上への協力が慣習化していること。これによって集合行為問題が解消され、共同体の集団としての利益が尊重される。また、共同体の活動への参加は慣習的な税の一種とみなされるため、それ相応の住民への公共財の提供が期待される。

伝統的な統治には様々な形態があり、そのすべてが民主主義制度に勝っているというわけではない。また、集合行為問題の統制と社会の閉鎖性は同じコインの裏表にある。しかし、リーダーの裏切りの抑制、人々の政策決定参加による情報の共有と住民の政策選好の顕在化、集合行為問題の解決と集団的な利益の向上など、住民の利益を拡大するために必要な条件についての多くの示唆を、伝統的な統治は与えてくれる。そして、それは近代的な民主主義制度がその期待される機能を発揮するためのカギのありかを示しているとも言える。■

著者プロフィール

川中豪 (かわなかたけし) アジア経済研究所地域研究センター長。博士(政治学)。専門分野は比較政治学。著作として『後退する民主主義、強化される権威主義——最良の政治制度とは何か』ミネルヴァ書房、2018年(編著)、*Political Determinants of Income Inequality in Emerging Democracies*, Singapore: Springer, 2016 (with Yasushi Hazama)など。

